

# 英語史の研究

寺 澤 盾

英米では19世紀以来多くの大学で英語史が教えられてきた。初期の頃は各時代の英文学の正典の英語に重きを置いていたが、21世紀になると世界英語やインターネット英語などといったトピックも扱うようになり、時代とともに英語史教育も大きく変貌を遂げている。Mary Hayes and Allison Burkette, eds. *Approaches to Teaching the History of the English Language: Pedagogy in Practice* (Oxford University Press) は、英語史に携わってきた学者・教員が現行の大学カリキュラムの中でこの科目をどのように教えていくのか、モデル授業の形で示している。日本における今後の英語史教育に関しても多くのヒントが詰まっており、大変有益である。

以下では、2017年1月～12月に刊行された英語史関連の文献をできるかぎり広く紹介していきたい。文献情報収集にあたっては三浦あゆみ氏のウェブページ *A Gateway to Studying HEL* (「2017年刊行文献」) を参照させていただいた。

## 1. 通 史

まず、一般向けに書かれた英語史本として Charlie Haylock and Barrie Appleby, *In a Manner of Speaking: The Story of the English Language* (Amberley Publishing) が挙げられる。著者の Charlie Haylock はイギリスのサフォークの芸人であり、本文に添えられたイラストは漫画家 Barrie Appleby による。The *Adventure of English* (2003) を著したノンフィクション作家 Melvyn Bragg はイギリスには「多くの学問分野でアマチュアの活動を許容する伝統がある」と述べているが、専門家でない人による英語史本が上梓されるところにイギリスにおける英語史のすそ野の広さが感じられる。英語史の教科書も2冊刊行されている。K. Aaron Smith and Susan M. Kim, *This Language, a River: A History of English* (Broadview Press) は、練習問題や用語集付きで入門者向けである。一方、Laurel J. Brinton, ed. *English Historical Linguistics: Approaches and Perspectives* (Cambridge University Press) は、英語史の専門家たちが史的研究へのさまざまなアプローチの仕方をケース・スタディによって示したもので、学部上級者または大学院生向けと言える。Brinton は2013年に Alexander Bergs と共編で分厚い2巻本からなる *English Historical Linguistics* (Mouton de Gruyter) を上梓しているが、それを再編・再録して新たに5巻からなる *The History of English* (vol. 1: *Historical Outlines from Sound to Text*; vol. 2: *Old English*; vol. 3: *Middle English*; vol. 4: *Early Modern English*; vol. 5: *Varieties of English*) を出版した。各巻

の始めに編者の二人が新たにイントロを付している。Donald Ringe, *A Linguistic History of English. Volume I: From Proto-Indo-European to Proto-Germanic* (Oxford University Press) の改訂版が出たことも言い添えておく。

Simon Horobin, *Does Spelling Matter?* については以前紹介したが(『英語年鑑2015』「英語史の研究」参照)、その邦訳(サイモン・ホロビン[著]・堀田隆一[訳]『スペリングの英語史』早川書房)が刊行された。現代英語のつづり字の不思議を歴史的に説きおこす好著が翻訳されたことで、日本の多くの一般読者にも資するところが多いのではないかと思う。

語彙史・語源を扱ったものとしては、Alexander Tulloch, *Understanding English Homonyms: Their Origins and Usage* (Hong Kong University Press) と Joanna Kopaczky and Hans Sauer, eds. *Binomials in the History of English: Fixed and Flexible* (Cambridge University Press) が管見に入った。前者は、egg (卵) や egg (けしかける) のような興味深い同音異義語 (homonym) をアルファベット順に取り上げ、その歴史を語源などにふれて説明したもの。後者は、for and against, dead or alive のようないわゆる二項名詞 (binomial) の発達を古英語から現代英語まで追った論文集。歴史的に見ると、一見固定していると思われる二項名詞表現に多様性・柔軟性が見られるのは興味深い。日本人研究者からの寄稿も含まれる (Michiko Ogura, “Binomials, Word Pairs and Variation as a Feature of Style in Old English Poetry”; Tadashi Kotake, “Binomials or Not? Double Glosses in Farman’s Gloss to the *Rushworth Gospels*”).

辞書関連のものとして、まず Tony Crowley, *The Liverpool English Dictionary: A Record of the Language of Liverpool 1850–2015* (Liverpool University Press) を紹介したい。ピートルズ発祥のリバプールの方言は Scouse として知られるが、本書はその方言から 2000 語あまり (e.g. abbadabba, Z-car) を収集し、その意味や歴史を用例付きで解説した方言辞典である。Kusujiro Miyoshi, *The First Century of English Monolingual Lexicography* (Cambridge Scholars Publishing) は Samuel Johnson 以前の近代英語期の英語辞書に関する研究である。

David Crystal はこれまで「語彙」(*The Story of English in 100 Words*, 2012)、「綴り」(*Spell It Out: The Singular History of English Spelling*, 2012)、「句読法」(*Making a Point: The Pernickety Story of English Punctuation*, 2015) に関する3部作を発表してきたが、*Making Sense: The Glamorous Story of English Grammar* (Profile Books) はその続編で今回は「文法」に焦点をあてている。英語では want や love などの状態動詞は一般に進行形にならないとされてきたが、近年こうした動詞が進行形で用いられることが増加しつつあり、Crystal は状態動詞の進行形は近い将来確立した用法になるだろうと予測している。このほかにも文法・統語分野では5冊の研究書が上

粹され豊作であった。Olga Fischer, Hendrik De Smet and Wim van der Wurff, *A Brief History of English Syntax* (Cambridge University Press) は、英語において過去 1500 年余りの間に起こった語順、名詞句、動詞句、従属節に関わる統語変化を理論的な観点から分析し、さらに変化の原因についても言語内的・外的の両面から考察している。Elly van Gelderen, *Analyzing Syntax Through Texts: Old, Middle, and Early Modern English* (Edinburgh University Press) は古英語から初期近代英語までの統語法の変化を追っているが、それぞれの時代のテキストを綿密に分析し、さらに写本などに立ち返って考察している点が従来の歴史統語論には見られない新しさを感じられる。Clarence Green, *Patterns and Development in the English Clause System: A Corpus-Based Grammatical Overview* (Springer) は英語における節 (clause) に関して、認知的・機能的観点から共時・通時的に研究したもの。Phillip Wallage, *Negation in Early English: Grammatical and Functional Change* (Cambridge University Press) は古英語から初期近代英語までの否定の史的発達を、negative concord や Jespersen の negative cycle にもふれつつ考察している。Michiko Yaguchi, *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach* (Kaitakusha) は 4 万例を超える OED の引用文の分析に基づいて存在文 (be 動詞以外が用いられるものも含め) の歴史的発達を記述した研究書である。

歴史意味論・語用論の分野では、Judith Huber, *Motion and the English Verb: A Diachronic Study* (Oxford University Press), Laurel J. Brinton, *The Evolution of Pragmatic Markers in English: Pathways of Change* (Cambridge University Press) および Alexandra D'Arcey, *Discourse-Pragmatic Variation in Context: Eight Hundred Years of LIKE* (John Benjamins) が注目される。Huber は運動 (motion) を表す動詞が古英語から中英語にかけてどのように変化したのかを、フランス語からの借用語 (e.g. enter, descend) などにもふれつつ考察している。Brinton は古英語期の *hwæt*, 中英語期の *whilom* から現代英語の *that said* までさまざまな pragmatic marker がどのような過程を経て発達してきたかという問題を個々の用例の詳細な分析を通して見ていく。Like は *It's like cold.* (なんか寒いね) のように緩意語として用いられたり、近年米国の若者を中心に *I was like*, "What!" (「え！」と私は言った) のように直接引用を導くこともあるが、D'Arcey は pragmatic marker として多様な機能をもつ like の史的発達を明らかにする。

これまで見られなかった新たな英語史研究として、Marianne Hundt, Sandra Mollin and Simone E. Pfenninger, eds. *The Changing English Language: Psycholinguistic Perspectives* (Cambridge University Press) を挙げたい。これは英語にみられる様々な史的变化の様態を 'salience', 'chunking', 'priming', 'analogy' などをキーワードに心理言語学の観点から考察した論文集。Elizabeth C. Traugott, "Low Salience as an

Enabling Factor in Morphosyntactic Change”, Christian Mair, “From Priming and Processing to Frequency Effects and Grammaticalisation? Contracted Semi-modals in Present-day English”, David Denison, “Ambiguity and Vagueness in Historical Change” など所収。

## II. 時代別

《OE》古英語に関連した研究として以下の3点が管見に入った。Leonard Neidorf, *The Transmission of Beowulf: Language, Culture, and Scribal Behavior* (Cornell University Press) は『ベオオルフ』写本における「間違い」(scribal errors)の詳細な分析を通して、多くの誤りは11世紀初めに現存する唯一写本を転写した写字生が作品(一般に制作年代は8世紀初めごろとされる)の言語・文化背景を十分に理解していなかったことに起因すると主張。さらに、Neidorfは必要であればテキストの校訂を積極的に行っていくという立場をとり、写本及び写字生を神聖視する近年の保守的姿勢を批判している。『ベオオルフ』のテキスト批評の新たな潮流となりうる記念碑的な研究と言える。古英語を中心に韻律分野で大きな貢献をしてきたブラウン大学名誉教授 Geoffrey Russom による新著が刊行された。*The Evolution of Verse Structure in Old and Middle English Poetry: From the Earliest Alliterative Poems to Iambic Pentameter* (Cambridge University Press) は古英語期隆盛であった頭韻詩の韻律が中英語において、どのように変容し衰退していったか、またそれに代わってジョーサーが用いた新たな韻律(iambic pentameter)が生まれた過程を詳細に追っている。Anna Wojtys, *The Non-surviving Preterite-Present Verbs in English: The Demise of \*dugan, munan, \*-nugan, \*purfan, and unnan* (Peter Lang) は、起源的には過去形であるが現在の意味で用いられる動詞、すなわち過去現在動詞(preterite-present verb)について、古英語と中英語における使用を詳細に分析し、その衰退の理由を探る。

《ME》中英語の分野では、まず日本人研究者による共編論文集として Akinobu Tani and Jennifer Smith, eds. *Studies in Middle and Modern English: Historical Variation* (Kaitakusha) が挙げられる。中英語から初期近代英語の韻文・散文・書簡などに関する6編の論文が収められている。Ewa Ciszek-Kiliszevska, *Middle English Prepositions and Adverbs with the Prefix be- in Prose Texts: A Study in Their Semantics, Dialectology and Frequency* (Peter Lang) は接頭辞 be- を伴う前置詞や副詞(e.g. before, beyond, behind, beneath, between, betwixt) の中英語期における分布を Innsbruck Corpus of Middle English Prose を用いて調査したものである。Sara Harris, ed. *The Linguistic Past in Twelfth-Century Britain* (Cambridge University Press) は12世紀のロマンス、法律文書、歴史書、韻文、聖人伝といった様々なジャンルで、ブリテンにおける複雑な言語史がどのように描かれているか考察している。

《ModE》はじめに、シェイクスピアの言語に関する論文集として Janelle Jenstad, Mark Kaethler, and Jennifer Roberts-Smith, eds. *Shakespeare's Language in Digital Media: Old Words, New Tools* (Routledge) を紹介したい。シェイクスピアの言語の研究に際しては、現在 the Internet Shakespeare Editions, the Early English Books Online-Text Creation Partnership, the Lexicons of Early Modern English collections, the Folger Shakespeare Library's Digital Image Collections など が利用可能であるが、本書はこうした digital tools を使ってどのような新たな研究ができるかを示した論文集である。初期近代英語関連のものとしては Imogen Marcus, *The Linguistics of Spoken Communication in Early Modern English Writing: Exploring Bess of Hardwick's Manuscript Letters* (Palgrave Macmillan) も重要である。これは Elizabeth I と同時代を生き、莫大な富と名声を得た伯爵夫人 Bess of Hardwick (c. 1527-1608) の残した書簡を詳細に分析した研究書である。また、Matti Peikola, Aleksii Mäkilähde, Hanna Salmi, Mari-Liisa Varila and Janne Skaffari, eds. *Verbal and Visual Communication in Early English Texts* (Brepols Publishers) は初期近代英語期（一部中英語期も含む）の写本や印刷本においてページのレイアウトや文字・活字が読者によるテキストの意味解釈にどのように影響を与えているのかという問題を考察した興味深い論文集である。“Disciplinary Decoding: Towards Understanding the Language of Visual and Material Features”, “Code-Switching, Script-Switching, and Typeface-Switching in Early Modern English Manuscript Letters and Printed Tracts”, “Seeing is Reading: Typography in Some Early Modern Dictionaries” など 10 本の論文を所収。

初期近代英語と後期近代英語の間<sup>はざま</sup>にあってこれまでやや等閑視されてきた 18 世紀の英語に関する研究が多く見られたのは 2017 年度の英語史研究の 1 つの特徴と言える。18 世紀は Samuel Johnson の辞書や様々な文法書が上梓され英語の標準化が推し進められた時代であるが、一方で当時の非標準変種が Daniel Defoe, Samuel Richardson, Robert Burns などの文学作品にも現れ、またスラング、隠語、地方方言などを集めた辞書 (*A New Canting Dictionary*, Francis Grose's *Classical Dictionary of the Vulgar Tongue*) も出版されている。Janet Sorensen, *Strange Vernaculars: How Eighteenth-Century Slang, Cant, Provincial Languages, and Nautical Jargon Became English* (Princeton University Press) は、18 世紀における ‘outsider languages’ を多くの例に基づき考察し、こうした周辺的な言語が社会に広く受け入れられていく過程にも言及している。Daniel DeWispelare, *Multilingual Subjects: On Standard English, Its Speakers, and Others in the Long Eighteenth Century* (University of Pennsylvania Press) も 18 世紀において標準英語の陰にあった他の英語変種・方言に光を当て、当時の英語の多様性を記述している。18 世紀後半は医学が大いに進歩した時代であるが、Elisabetta Lonati, *Communicating Medicine: British Medical Discourse in Eighteenth-*

*Century Reference Works* (Ledizioni) は当時出版された医学参考書の英語を綿密に分析している。

後期近代英語に関する研究も多く見られる。秋元実治『Sherlock Holmes の英語』(開拓社)は Sherlock Holmes の英語に関してその用法・意味・文法を詳述したものである。Ingrid Tieken-Boon van Ostade, ed. *English Usage Guides: History, Advice, Attitudes* (Oxford University Press) は、後期近代英語期の usage に関する教本・言説の歴史、規範主義を扱った論文集であり、David Crystal (“*Punch as a Satirical Usage Guide*”)や Geoffrey K. Pullum (“*The Usage Game: Catering for Perverts*”)も執筆者に名を連ねている。Minna Palander-Collin, Maura Ratia and Irma Taavitsainen, eds. *Diachronic Developments in English News Discourse* (John Benjamins) は後期近代から現代にかけて新聞・雑誌などのジャンルにおける英語の発達を迫る論文集である。同じく後期近代英語期の新聞の英語を分析したものとして David Reuter, *Newspapers, Politics, and Canadian English: A Corpus-based Analysis of Selected Linguistic Variables in Early Nineteenth-century Ontario Newspapers* (Winter Verlag) が挙げられる。これは 19 世紀初めのカナダ英語について、オンタリオで刊行された新聞をコーパスにして、当時の政治との関わりも見ながら考察している。

《PDE》現代英語を扱った研究としては、音声資料を対象にした Raymond Hickey, ed. *Listening to the Past: Audio Records of Accents of English* (Cambridge University Press) が注目される。英語の音声録音は 20 世紀前半から本格的に始まったが、本書は英米だけでなく、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカにおける英語(標準変種だけでなくその他の変種も含む)の音声資料をそれぞれの英語変種の専門家が詳細に分析したものである。今まではおもに書かれた資料から記述されてきた 20 世紀の英語に新たな深みを加えるものである。Markku Filppula, Juhani Klemola, Anna Mauranen and Svetlana Vetchinnikova, eds. *Changing English: Global and Local Perspectives* (Walter de Gruyter) は世界中で用いられている様々な英語変種に現在どのような変化が起こっているかを考察した論文集である。“Omission of Direct Objects in New Englishes”, “The Definite Article in World Englishes”, “Extended Uses of the Progressive Form in Inner, Outer and Expanding Circle Englishes” など興味深いタイトルが並ぶ。Paul Baker, *American and British English: Divided by a Common Language?* (Cambridge University Press) は二大英語変種に焦点を当て、1930 年代、1960 年代、1990 年代、2000 年代の 4 つの時期におけるイギリス英語とアメリカ英語についてコーパスを援用して調査する。発音・綴り・文法・語彙だけでなく、discourse marker といった語用論的な面にも目を向け、英米語に見られる様々な変化を明らかにしている。

### III. 論文集 (すでにふれた論文集については割愛)

学会の成果をまとめた論文集としては、Jacek Fisiak, Magdalena Bator and Marta Sylwanowicz, eds. *Essays and Studies in Middle English: 9th International Conference on Middle English, Philological School of Higher Education in Wrocław, 2015* (Peter Lang) が挙げられる。これは、2015年にポーランドのヴロツワフで開催された中英語学会で発表された15本の論文(語学関連12本、文学関連3本)を所収。3名の日本人研究者からの寄稿を含む(Minako Nakayasu, “Spatio-Temporal Systems in Margaret Paston’s Letters”, Michiko Ogura, “What Really Happened to ‘Impersonal’ and ‘Reflexive’ Constructions in Medieval English?”, Fumiko Yoshikawa, “Dialogues and Rhetorical Questions in Middle English Religious Prose”).

このほか英語史に関連する論文集としては、まず language contact や multilingualism をキーワードにした論文集2点が挙げられる: Elise Louviot and Catherine Delesse, eds. *Studies in Language Variation and Change 2: Shifts and Turns in the History of English* (Cambridge Scholars Publishing); Päivi Pahta, Janne Skaffari and Laura Wright, eds. *Multilingual Practices in Language History: English and Beyond* (Mouton de Gruyter). 前者には, “English and French in Medieval England: Spoken Bilingualism or Code Diglossia?”, “Code-Switched Adjectives in Macaronic Sermons”, 後者には “Code-switching in Anglo-Saxon England: A Corpus-based Approach”, “A Semantic Field and Text-type Approach to Late-medieval Multilingualism”, “A Multilingual Approach to the History of Standard English” など興味深い論考が並ぶ。

### IV. 学術誌掲載論文

2017年に国内の学術誌に掲載された英語史関連の論文を以下、学術誌別にリストアップしておく。なお、*Poetica* に関しては前回記載できなかった *Poetica* 86 (2016) も含めてある。昨年同様、国内紀要に発表された論文に関しては残念ながらスペースの都合上割愛せざるを得なかったが、『英語年鑑』の「個人研究業績一覧」を参照されたい。

〈*Studies in Medieval English Language and Literature* No. 32〉 Takami Matsuda, “Palmer and *Corpus Mysticum* in the *Canterbury Tales*”, Satomi Hamada, “Describing the Link between Orality and Literacy: Chaucer’s *Tale of Sir Thopas* in the Transitional Period”, Thae-Ho Jo, “Son of the Devil: Christian Corruption and Saracenic Attributes in *Sir Gowther*”; 〈*Studies in English Literature English Number 58*〉 Michiko Ogura “Compound Reflexive as a Metrical Filler, or *Self in Himself* used as an Alliterating Element?”; 〈『英文学会支部統合号 第10巻』(『九州

『**英文学研究**』第 34 号 2017) 久保善宏「進化言語学から見た多項等位構造」; 〈『**日本英文学会第 89 回大会 Proceedings**; 付 2016 年度支部大会 Proceedings』〉杉山ゆき「*The Buik of King Alexander the Conquerour* におけるアレクサンドロス像——理想の君主像形成における *Secretum secretorum* の影響」, 足達賀代子「女性君主論の試み——『妖精の女王』における美德のカatalog」, 茨木正志郎「二重限定の消失と限定詞の文法化について」, 久米祐介「同族目的語構文と軽動詞構文における文法化と構造変化」, 山村崇斗「助動詞後位省略構文の通時的観察と理論的考察」, 長野明子「英語の名詞由来派生形容詞の 2 種類について」, 玉川明日美「*Sir Gawain and the Green Knight* における ‘prys’——Gawain のアイデンティティの形成をめぐる」, 中村芳久「文法化を問う——再帰中間構文の受身用法の文法化」, 市川泰弘「*Get-passive* の成立と意味拡張——*Get-Inchoative* 構文と *Get-Passive* 構文」, 平山直樹「『パストン家書簡集』における義務の法助動詞——shall を中心に」; 〈**POETICA 86**〉 Atsushi Ajiro, “Sharon Turner, a Historian of Anglo-Saxon England and *Beowulf*”, E.G. Stanley, “The Brothers Grimm and Anglo-Saxon Language and Poetry”, Porter White, “*Coedmon* after Junius: Three Nineteenth-Century Editorial Encounters”, M.J. Toswell, “Anna Gurney: The Unknown Victorian Medievalist”, Haruko Momma, “The Newly-Found Kemble Notebook and an Old English *Hildebrandslied*: A Mirror of the New Philology in the 1830s”, Daniel F. Kenneally and Jane Roberts, “Oswald Cockayne (c. 1808-1873): Clerk in Orders, Schoolmaster, Scholar”, Tsukusu Ito, “News from Eastern Lands on Northern Languages: Notes on a Japano-Anglo-Saxon Library”; 〈**POETICA 87**〉 E. G. Stanley, “A Poet and a King”, Michiko Ogura, “Pronoun Retention in Old and Middle English Relative Clauses”; 〈**POETICA 88**〉 Natalia I. Petrovskaia, “Charlemagne, the Idol of Cadiz and Twelfth-Century Political Prophecy”, Tsuyoshi Mukai, “William Bonde’s *Dyrectory of Conscience* and *Pylgrimage of Perfection*: A ‘Co-ordinated Programme of Publication’ at Syon Abbey”, Satoko Tokunaga, “William Caxton and ‘Englishing’ the *Legenda aurea*”, Ann M. Hutchison, “Syon Abbey: Writing for the Faithful”, Miwako Takahashi, “Textual Cabinets of Curiosities: The Culture of Collecting in Early Modern English Texts”, Martin Ingram, “Shame in English Culture from Shakespeare to Jane Austen”, Samantha Rayner, “Penguin and the ‘Shipwrecked Malory Project’”; 〈**JELS 34**〉 Bai Chigchi, “PP-Fronting in Postnominal Participial Phrases in the History of English”, Taro Ishiguro “The Clause-Initial *nu* in the Old English *Andreas*”, Erina Iwai, “Connective Functions and the Functional Development of a Concessive Discourse Marker *Still*”, 三上傑「素性継承システムのパラメータ化と英語史における統語システムの段階的变化」, 宮下治政・時崎久夫「*Ancrene Wisse* にお



## 英語史の研究

ける本動詞と目的語の相対的語順と借入語」, 中川直志「tough節の範疇についての一考察——共時的視点と通時的視点から」, Tomoyuki Tanaka, “Object Movement and Left Periphery in the History of English”, 柳朋宏「英語の二重目的語構文における受動化と格付与メカニズムの通時的変化」; 〈『近代英語研究』No. 33〉本多尚子「虚辞構文の歴史的発達について」, Shota Kikuchi, “A Comparative Study of *Wh*-Relativizers in Shakespeare and Fletcher”, 山本史歩子「The *Female Spectator* の英語——関係代名詞を中心に」, 前田満「To think 感嘆文再考」; 〈『言語研究』152〉田中俊也「ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞 IV, V 類に見られる形態的差異について——Schumacher (2005) 論考の批判的考察と形態的混交説からの提案」; 〈『英語コーパス研究』24〉後藤一章・和泉絵美・椎名美智・田畑智司「コーパスアノテーション(タグ付け)の功績と課題」, (東京大学教授)